

スラムの自生的リーダーと協同戦略のジレンマ

－ ドミニカ国のスラムの事例 －

江 口 信 清

This article aims to clarify the characteristics of the autogenic leaders among the slum dwellers of the Commonwealth of Dominica. The largest slum in this country is Tarish Pit which has about 170 households and 600 residents. This community has been formed by the squatters from all over the island after the attack of the strong hurricane in September, 1979.

The community has been referred as slum, hotbed of crimes or evil, and so on by the outsiders. However, it is clear that there are two sets of people among the dwellers: those who have been trying to realize the middle class values and those who are not interested in it at all. It has been very hard to bundle these residents into one integrated force in terms of the community issues. Yet, this community has some autogenic leaders who have tried to promote some projects for the community as a whole. It is found that these leaders regard hard work, education, planning in long term, cooperation as very important. They have purchased the land plots and built houses. They are quite openhearted. Yet, they are not necessarily supported by the residents even though they are referred as leaders by some of these residents. Many of the residents are not supportive toward the community issues. Here, we can see the dilemma of cooperative strategy among the slum dwellers. The common features among the leaders found in Tarish Pit resemble to those found in the slums of Pokara, Nepal by Yuji Yamamoto.

はじめに

スラム社会の住民の属性は、けっして一様ではない。多様な出身地、多様な背景を持つ住民からなるスラム社会は、基本的には不良住宅と不十分な生活状態が支配的である場合が多い。発展途上国の貧困者の多くがこのようなスラム社会に生活しているのだが、どのようにしてこれらの人々の生活を改善し、全

体として発展していけるのか、ということが議論され始めて久しい。スラム社会に外部から経済的援助を実施するだけでは貧困な人たちが抱える問題を根本的に解決することにはならない。一部の人を潤すことはできても、全体の貧困を解消することにはならない。異なった価値観や考え方をもつ人たちを束ねることで、一団となって社会の改善に取り組むことが最善の道であることはいうまでもない。当該社会内部の人たちが、自分たちの人的、文化的資源を有効に活用することによって発展しようとする取り組みは、内発的發展と称されてきた。そのために住民の内で人々を組織し、リードする人を山本勇次は自生的リーダーと称している（山本 2001）。自生的リーダーとはどのような特性を持ち、彼らを支える人たちとどのような関係を持っているのだろうか。また、まとまればより大きな力を発揮することができると分かりながら、まとまることのできない状況を「協同戦略のジレンマ」と私たちは称してきたが、貧困問題の解決のためには、このような状況がなぜ生じるのか、そしてどのようにすれば克服できるのかを十分に分析・考察する必要がある。これらの2つの問題、1つは自生的リーダーに関する問題、そして協同戦略のジレンマの問題について、事例を通じて若干考察することが本稿の目的である。

貧困の文化について論じた人類学者オスカー・ルイスや、彼の批判者たちは、貧困な人たちの生活向上のための運動に資する指導者については、ほとんどなにも言及してこなかった。外部からの一方的な援助は貧困の撲滅にはしばしば役に立たず、むしろ内発的な動きこそが、近代的発展という潮流に取り残されてきた人たちにとってのもう一つの生きる道である、という内発的發展論によれば、当該社会の人々は自発的に、しかも集団として、共通の目標に向かって、協同で作業をしていかなければ貧困の撲滅という目標を達成できないことはいうまでもない。その際、集団を指導する存在として、鶴見和子は市井三郎の定義（市井 1963）を引用して、集団を引っ張るキー・パースンの必要性を指摘している（鶴見 1996）。そのような人物とその人物を支持する人たちが一丸となって、はじめて内発的な発展の可能性が生じるのである。

他方、急激な資本主義化は、スラム社会を形成する上での一大要因である。しかし、より直接的で、具体的な要因が何であるかについてはこれまでほとんど触れられないままであった。何がスラム社会を生み出す直接的な要因なのかを考察することは、スラム社会の形成過程を理解する上で根本的なものである。それは学術的な意義だけではなく、スラムの発生を防止するという実的な側面でも大きな意味を持つといえよう。

事例として取りあげるドミニカ国が位置するカリブ海地域は、とくに16世紀以降、西洋の初めての本格的な海外の植民地として経営されたが、19世紀の奴隷解放後もプランテーション経済、あるいはモノカルチャー志向の経済が続いてきた。しかし、砂糖やバナナ等の換金作物の国際市場における価格が低迷し、また代替物の出現や、競争相手の出現などによって農業で金を稼ぐことがたいへん難しい状況が近年続いている。このようなカリブ海の一国であるドミニカ国のスラムは、オスカー・ルイスが調査したメキシコのメキシコシティ、アメリカ合衆国のニューヨーク、プエルトリコのサンファン、キューバのハバナのスラムと多くの共通点を有している。この国のスラムの形成過程や特徴の素描については、すでに別稿で示してきた（江口 2001他）。

本稿では、上述のカリブ海の小国ドミニカ国のスラム社会の形成要因についても考察する。

1 ドミニカの不法占拠地区とスラム

1 - 1 歴史的な適応の一部としての不法占拠

日本の佐渡島の大きさにほぼ匹敵するドミニカ島の中央には1600m級の山を含む山脈が南北に走り、硫黄臭を伴う噴煙を上げているところも数ヶ所ある。この島では、公有地の不法占拠が奴隷解放直後から広範に行われてきた。火山島ゆえに平坦な土地が少なく、その平坦地のほとんどがプランテーションに占められていたために、奴隷解放によって自由になり、自営農民化していく人た

ちの多くがプランテーションの後背地の農業不適地とされていた王室御料地 (Crown land) を不法に占拠し、家屋を建設し、村落を形成し、畑を作っていたのである。現金収入の機会の少ない人々にとっては、土地を購入するよりも、むしろ不法占拠することが耕作地を拡大するための手っ取り早い方法であった。奴隷解放後の自由になった人々にとっては、王室御料地の不法占拠はいわば、生きるための適応の一部ともなっていたのである。後に、政府がこれらの土地を測量し、個々の占拠者に分譲して、所有権を認めるという形で、私的所有へと移行していった。したがって、伝統的な農村において、不法占拠がまったくないかといえ、けっしてそうでもなかったのである (Thelwell 1950)。農村部の多くでもスラム的状况が進行しているところもあるが、都市のスラムとは違って、最低限の食料が自家消費のために生産できる場合が多く、スラム化の進行は顕在化しないか、気づかれぬままにあるだけである。

他方、図1は、いわゆる伝統的な農村の外部に第二次世界大戦後形成されてきた不法占拠地域の分布を示しているが、全島的に存在している。

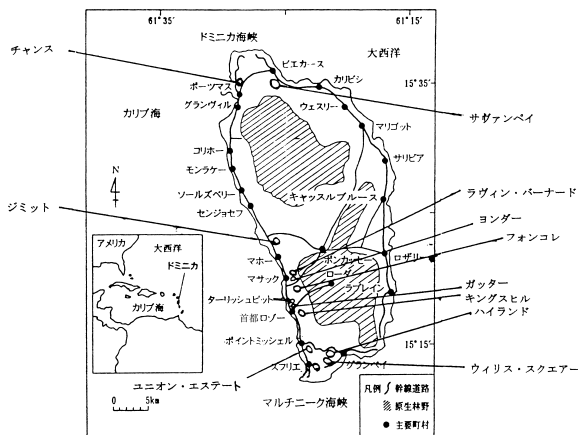


図1 ドミニカの不法占拠集落の位置

出所: Magellan Geographix (1996) *Dominica* などより作成

注: 手書き線で囲まれたところに不法占拠地(居住のために使用)がある。

1 - 2 首都ロゾーのスラム化の進行とスラム・クリアランス事業

1 - 2 - 1 1945年の実態調査の結果

さて、首都ロゾーは人口増加の傾向が続き（表 1）、町の周縁地区がスラム化の様相を呈し始めているとして、1945年にTown Planning Advisor to the Comptroller for Development and Welfareの手によって、低所得者層の居住地域の大部分でその実態調査が実施された。この結果を受けて、スラムクリアランス事業のための法整備が図られることになったのである。職業、平均家賃、衛生状態、単位面積当たりの住宅と家族数から見た密度、家屋の構造状態、過密度、そして必要とされる新しい居所についての調査の結果、ひどい住宅問題が存在することが明らかにされた。調査対象域内の28ブロックの各ブロック内には、1エーカー当たり47家族が住んでいた。この数字は平均的な数から見れば、そう多いというわけではないが、ひじょうに密集している地区もある。この地域の人たちに見られる顕著な特徴は次のようなものである（Town Planning Advisor to the Comptroller for Development and Welfare 1946：25～27）：

表 1 首都ロゾーの人口の推移

年	1891	1901	1911	1921	1946	1960	1970	1981	1991
人口	5,186	5,764	6,577	6,803	9,752	10,417	9,949	8,346	15,853

注）出典は*Commonwealth of Dominica Statistical Digest*, No.8, 1995, P.1。1991年の数字にはフォンコレ、グッドウィル、サナロマン、バスエステート、エルムシャルといった旧ロゾーに隣接する地域が新たに含まれている。市域が拡大されたのであるが、おおよその数字であり、スラムの人口が正確には反映されていないようである。

1）職業

主たる生計維持者の職業は、労働者、行商人、家政婦である。

2）平均家賃

調査対象家族の約60％が借家に住まい、平均的な住宅は2部屋からなる。

3) 衛生上の施設

衛生上の施設は通常、1 ブロックの住民全体のための共同の水道栓、数家族で使用するバケツのトイレからなる。より住密度の高い地区では、公共のバケツの便所のみが使用される。

4) 住宅のタイプ

住宅のほとんどは木造の平屋である。数軒の住宅が石壁の2階建てである。バラックの類はごく少なく、2,3の事例が報告されているのみである。家屋構造上の腐敗の程度についてみると、調査対象となった1,063家屋のうち、557家屋(52%)が構造的に居住に適さない状態にあることが分かった。上述した28のブロックでは、このような家屋の割合はほぼ60%にも達した。これらの家屋は木製のために、シロアリや穿孔虫に食い荒らされて腐っており、どれほどつぎはぎしても安定した状態には戻らない状態にある。しかし、現状ではどうしようもないので、数年間維持するためにもつぎはぎするしかないと考えられる。

5) 超過密

家屋内の超過密さに関していえば、健康上、そして社会学的にも非常に問題がある状態にある。超過密の状態が、家屋の構造上の腐敗と平行して見られる。家屋で居住する1人当たりの居住空間が40平方フィート以下の場合、ここでは超過密とみなされる(1歳以下の乳児はこれに含まれない)。このようにしてみると、調査地全体で、1,714家族のうち500家族(30%)が超過密の状態下で生活していることが分かった。また、スラムクリアランスと再開発予定の28のブロックでは、1,174家族のうちの436家族(37%)が超過密な状態下で生活していることになる。この状態下で生活している家族の大半は、1つの住居あるいは1部屋から成る家屋や借り間を2家族、あるいはそれ以上の家族で共有している、と調査結果は記している。

これらの調査結果より、超過密な状態から抜け出し、新しい住居を必要とす

る家族や単身者の数は289件あり、構造上の腐敗のために居住に適さない家屋に代わる新しい住居を必要とする家族の数は557件ある、と算出している。

1 - 2 - 2 「スラムクリアランス」と「再開発」対象地域をさらに悪化させないために必要な行動

「スラムクリアランス」と「再開発」対象地域のよりいっそうのスラム化を防止するために必要な行動として、同報告書は次のような諸点を指摘している。

- 1) 建物の数と規模を示す暫定的な再編計画の準備する。
- 2) 住宅局の許可なく、新たな建物の建築を認めない。
- 3) 構造的に腐敗していると宣告された建物は、住宅局の許可なしに販売・再賃貸・又貸しすることは認められない。
- 4) 問題があったり修理が必要な家屋は、住宅局の許可なしに販売・再賃貸・又貸しすることは認められない。
- 5) 構造的に適さないすべての建物に居住者が移動したり、別な施設が見つければ、できるだけ速やかに取り壊し命令が下されるべきである。
- 6) すべての超過密な状態で生活している家族は、雇用場から手ごろな距離の範囲内に別な施設が見出されるや否や移動させられるべきである。
- 7) 許可なく構造的に手を加えたり、家屋を拡大したりすることは認められない。
- 8) 新たな政府の住宅計画の住宅に移るように、あるいは田園地帯では「所有者一占拠者」計画を利用するように、スラムクリアランス事業対象地に生活する家族には優先や奨励がされるべきである。

1 - 2 - 3 「スラムクリアランス」と「再開発」対象地域の改善法

さらに同報告書では、「スラムクリアランス」と「再開発」対象地域の改善方法として、次の3点を挙げている。

- 1) 地域の再編を進めるための手段として、特定の家屋は（政府の費用で）移動されるべきである。
- 2) 都合がよければ、特定の家屋は住宅局によって購入されるか、修理されるか、あるいは拡張されるべきである。
- 3) 更地は住宅局によって購入され、再開発されるか、あるいは許可された計画に沿って私的な開発業者に貸されるべきである。

このように報告書ではスラムクリアランスと再開発の方法を提言したのだが、事業は着手されず、ロゾーの過密状態は容易には解消されなかった。政府は、しかし、別な方法を実施することで、過密の緩和を図ろうとした。

1 - 2 - 4 代替地の用意

政府は、不在地主の所有になり、経営も停止状態にあった、ロゾーの北に位置するグッドウィル農園（プランテーション）を1940年代に購入した。この農園は緩傾斜地の434エーカー（1エーカー＝4,046.9平方メートル）からなり、政府はここに住区、病院、学校、レクリエーション場、農業試験場などを計画した。ロゾーの住宅事情は上述の報告書の調査結果に示されるように飽和点をはるかに超えていると考えられるので、この住区にロゾーのスラム地域の人たちを優先的に移動させようと計画したのである。434エーカーのうちの200エーカーほどがパイロット計画地区として利用可能だという。ロゾーからごく近い距離にあり、ロゾーへの通勤にも便利な位置である。このグッドウィルの北に隣接する地域、今日のガッター村はグッドウィルの人たち用の新たな墓地として計画されたが、後に不法占拠され、スラム化し、またその北のターリッシュピットは後にスラムとして成長することになる（図2 参照）。



図2 ロソーと近郊地帯

出典：ドミニカ政府 1991年版、1:10,000をさらに28%縮尺したもの。太線で囲まれたAの地域はロソーの旧市街、Bはグッドウィル、Cはガッター、そしてDはターリッシュビット。

2 不法占拠の歴史的背景

さて、図1に示されたように不法占拠地は全島的に見られるが、それらの多くに共通点が見い出せる。それらの共通点は、1) 政府の住宅計画 (Housing Scheme) 地域の周縁部に立地することである。住宅計画の土地は、不在地主の大農園を政府が購入したところで、たいてい、平坦な土地や、山地や溪谷の緩やかな斜面上に位置し、不法占拠地はその周縁部の未利用地であることだ。そして、2) 不法占拠集落は1979年9月のハリケーン・デービッドの襲来後に主として形成されてきたが、それ以前から小規模に形成されていたところもある。3) ほとんどの集落は、外部の人たちからはネガティブ・イメージで見られ、一部の若者が大麻やドラッグを売買したりしている。4) 政府による合法化の措置が取られてきた。その結果、不法占拠地は測量され、道路が建設さ

れ、電気が引かれ、水道が設置され、分譲されてきた。しかし、不法占拠地であるがゆえに、一般より割安で居住者に売られる。しかし、購入せずに不法占拠を続ける者や、未測量地に新たに小屋を建てて住む者が出ている。5) 住民は生まれ故郷との関係を維持し、しばしば農作物を送ってもらうし、しばしば帰郷する。

とくに1)の共通点は、地形上の特徴であるが、政府が購入した大農園自体は比較的平坦な土地からなるところが多く、不法占拠はその周辺部で生じる。大農園のとくに後背地は農業に適していないところ、すなわち傾斜が急であるがゆえに、農業に不適な王室御料地であり、未利用のままであった場合が多い。

次に紹介するスラムは政府の住宅計画に基づいて開発されたグッドウィルの北に形成されたかつてのスラム、ガッター・ビレッジの北に位置している。

3 都市の発達と周辺地域での不法占拠とリーダー

3 - 1 ターリッシュピット (Tarish Pit)

ターリッシュピットの事例については拙稿(2001)ですでに触れているが、ここでは簡潔に概況を述べることにする。ターリッシュピットは、主都ロゾーの北約3kmの距離にある丘の上に位置し、かつて採石場として開かれたところである(図2)。「軽石採石場」(Pumice Quarry)と称されていたが、実際には道路建設等で必要とした土砂が採られていた。

丘の一角(北と東)が切り崩された形になっており、海岸道路からここにいたるまでの斜面上にも小屋が建てられている(図3)。ターリッシュピットの南側には、かつて不法占拠され、現在では政府によって測量され、個別に分譲された私有地からなるガッターヴィレッジが位置している。ここは低い傾斜上に立地しているために、雨が降れば、ターリッシュピットからガッターヴィレッジの方へ水が流れていく。私営のマイクロバスが町とターリッシュピットの

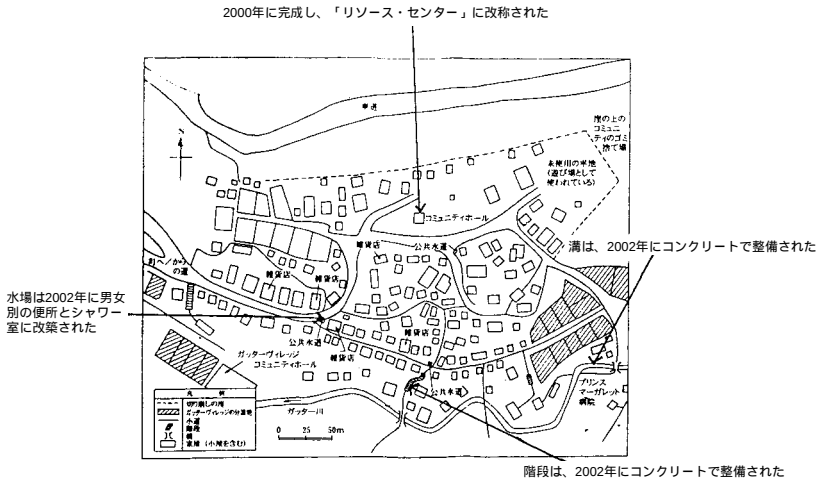


図3 ターリッシュピットの概念図

出典：江口信清 2001「ネガティブな他者の創出ーカリブ海ドミニカ国のスラムの事例ー」藤巻正己編『生活世界としての「スラム」ー外部者の言説・住民の肉声ー』（古今書院：127ページ）の図1・2に手が加えられた

間を往復している。とくに朝夕に多数の運行がある。このコミュニティから町までは徒歩約20分であり、町の仕事場などに徒歩で通う人も多い。コミュニティ内には保育園、幼稚園、あるいは小学校がないので、子どもたちは隣接する地域の施設に通う。コミュニティ内に畑を持つ人はいない。ココヤシの木を庭に生やしている世帯が若干数ある。

出身地をはじめとする属性の異なった人たちからなり、コミュニティの統合性は決して高くはない。1996年に村落委員会が設置され、委員長1名と委員6名が3年毎の選挙で選出されている。設置の時点で、1つのコミュニティとして公に認知されたということになる。1998年の時点で175世帯があり、そのうちの89世帯が不法占拠をしていた。1994～1997年には政府の手によって測量が実施され、不法占拠する人たちのいくばくかが土地を購入してきた。1998年に建設途上にあったコミュニティ・ホール（「リソース・センター」）

は2000年には完成し、1996年に結成された村落委員会は、その時以降管理委員会に名称を変更している。委員会の最大の任務は、リソース・センターの管理・運営であるからだ。

今日、このコミュニティに現存する組織は次のとおりである。

組織名	会員数
管理委員会	2000年に7人→11人へ増員
ダイナミック・デュード・ドミノ・クラブ	15人
スモール・ゴール・フットボール・チーム	25人

4 誰がターリッシュピットのリーダーなのか

4 - 1 名指しされた3名のリーダーの共通点

4 - 1 - 1 ターリッシュピットへの転入時期と転入前の居住地

ターリッシュピットの全世帯主に対して実施したインタビュー調査によれば、回答者86名による回答結果は表2に示されている。リーダーであると最も多くの人から名指しされたのはケニス・チャールズ、そして次点はマヴリン・アダムズ、そして3位がテルフォード・ローレントである。

この3名の共通点の一つは転入時期が1979年であることである。1979年には、転入時期を回答した89世帯のうちの29世帯（約32%）がターリッシュピットにやってきている。これは、2003年にいたるまで最も転入者が多い年に該当する。ハリケーン・デーヴィッドが島全体に壊滅的な被害を与えた年である。この年の転入者の転入理由は、それまで住んでいた家屋が破壊され、行き場無く、かろうじて小屋を建てるだけの空間があったターリッシュピットで家を建てて住むためであるとしている。1980年には、ハリケーン・ヒューゴが襲来し、これも大きな被害をドミニカの人たちに与え、この後にも人々の流入が見られる（図4）。

表2 ターリッシュビットのリーダーと目される3名

氏名	ケニス・チャールズ	マヴリン・アダムズ	テルフォード・ローレント
年齢（歳）	49	41	40
性別	男	女	男
現住地への転入年	1979	1979	1979
世帯規模（人）	3	6	5
職業	港湾労働者	病院事務	大工
世帯の月収（EC\$）	600.00	3,200.00	2,100.00
世帯の稼ぎ手（人）	1	3	2
土地所有	購入（支払い中）	購入（支払済み）	購入（支払い中）
家屋の材質	コンクリート	コンクリート・木	コンクリート
トイレの有無	有	有	有
水道の有無	有	有	有
テレビの有無	有	有	有
冷蔵庫の有無	有	有	有
洗濯機の有無	無	有	無
電話の有無	有	有	有
パソコンの有無	有	無	無
教育に関する見解	人的資源をさらに開発するために重要	コミュニティが貧困から脱出するために子どもたちを教育することが重要	自力の発展のために教育は重要
コミュニティ開発にとっての問題点	衛生、移動の自由がないこと、貧困	失業と教育への情熱のなさ	失業とドラッグ

注）2003年8月6日～12日のインタビュー調査による。この3名以外に、12人の人がリーダーとして名指しされたが、ここでは上位の3名に限って取り上げた。

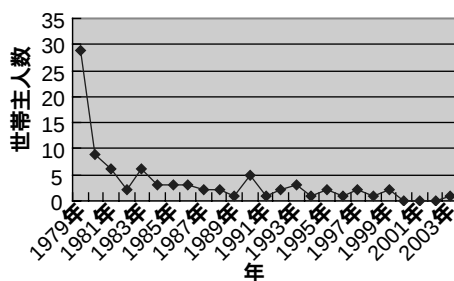


図4 ターリッシュビットへの年別流入世帯数

リーダーと目される3名はこのコミュニティに落ち着いた最初の集団に属しており、それだけコミュニティの成立の歴史にも通じているし、深い愛着を持っている。彼らの子どもたちはこの地で生まれ、この地が故郷なのである。

テルフォードとマヴリンは出身地がグッドホープだが、テルフォードがグッドホープから直接ターリッシュピットへ出てきたのに対して、マヴリンは隣接する「スラム」ガッター村から同じ時期に転居して来た。ケニスもターリッシュピットの西に位置する海岸沿いの集落ポッターズヴィルから同じ時期に転居している。だから、時期は同じでも、転居前の居住地は異なっている。ターリッシュピットの世帯主89人の、ターリッシュピット転入直前までの居住地をみると、ガッター、ロゾー、ポッターズヴィル、グッドウィル、リヴァー・ストリート、リヴァー・バンク、ストック・ファーム、バス・ロードのようなターリッシュピットに隣接するか、あるいは今日、ロゾーに含まれる地域から69人がやってくる。それは回答者全体の77%近くになる。1979年にはすでに少なくとも10世帯は住み着いていたようだが、ハリケーン・デーヴィッドの爪あとが生々しい時期に多くが流入し、その後もロゾーやガッターからはぼつぼつと流入していたことが分かる。出身地は西海岸中央部からだけではなく、西海岸の南北や東海岸からも見られる。

表3 ターリッシュピット住民の土地の所有形態

所 有 形 態			
	購 入	不法占拠	賃 貸
世帯数	29	51	9

注) 調査可能だった89世帯の結果であって、留守宅や空き家、そして数えることができなかったバラックを除いた数である。

4 - 1 - 2 土地・家屋の所有

第二の共通点は名指しされた3名のリーダーはいずれも現在の土地を購入していることである。調査の回答者89世帯のうち、政府から土地を購入したも

のは29世帯に過ぎず、9世帯が家屋を借りており、圧倒的多数の51世帯が不法占拠していることが表3からも分かる。

ターリッシュピットへの流入時期が早いからといって、土地を購入しているわけでは決していない。ただ、初期の流入者の多くが購入している。

4 - 1 - 3 正式な結婚

第三の共通点は、3名のリーダーは正式に結婚しているということだが、ケニスのみは一度結婚して、離婚した後、男手1つで娘2人を育てている。ちなみに、ターリッシュピットには、調査に回答した89世帯のうち39世帯が女性世帯主によるものである。これは全体のおよそ44%にものぼるのである。伝統的にドミニカの農村社会では、教会で正式に結婚した人たちは社会的に尊敬される対象であると言われてきた。しかし、同居してはいるけれども正式には結婚していない事実婚が当たり前のように行われており、これは社会的に許容されている。子どもたちが成長し、独立し、生活に余裕が出てきた場合に正式に結婚する人たちが多いのだ。

家賃を払って居住する人たちの半数は1995年以降に流入した人たちで、ターリッシュピットにも土地の余裕がなくなり始めていることをうかがわせるが、今回、空き家14軒が存在した。この所有関係に関しては、今のところは不明である。

4 - 1 - 4 リーダーと見なされる理由

四番目の共通点は、3名ともに村落委員会の委員を務めているという点である。リーダーであると考えられるから村落委員会の委員に選ばれたのか、あるいは村落委員に選ばれているからリーダーであると村民が答えているのか、今の段階で判断することは難しい。なぜなら、ケニス・チャールズをリーダーであると答えた回答者31人のうち、リーダーと見なす理由を示さない人がじつに19人（約61%）もいるのに対して、「村落委員会のメンバーだから」と答え

る人が6人いたことからである。積極的な理由をあげる人はわずか4人しかおらず、しかも「若者を支援するから」「O.K.だから」「何かをしようとしているから」といった内容でしかない。これに対して、「彼らは[村落委員会の] 責任者だが、なにもしない」「彼らはリーダーだが、コミュニティをきれいにさせていない」といった否定的な見解が2件あった。この見解も、適切な素質を持つので彼らがリーダーと見なされているわけではなく、たまたま村落委員会の委員をやっているからリーダーと見なされていることを推測させる。マヴリン・アダムズをリーダーとして回答した26人のうち19人(73%) が明確な理由を示していない。彼女の場合も「村落委員会のメンバーだから」リーダーと見なしていると5名が回答しており、「[リーダーとしては] よくない」、あるいは「彼らはリーダーだが、コミュニティをきれいにさせてはいない」という否定的な見解を持つ人が2名いる。さらに、テルフォード・ローレントの場合、リーダーと見なすと回答した21人のうち14人(67%) が明確な理由を示していない。また、「村落委員会のメンバーだから」リーダーと見なしていると回答した人が1名いるのに対して、積極的な意見として「O.K..だから」「何かをしようとしているから」「地域の人たちがよく知っているから」そして「村落委員会の委員で、コミュニティ開発を支援するいくつかのプロジェクトを主導するから」が挙げられている。否定的な意見として、「彼らは[村落委員会の] リーダーだが何もしない」あるいは、他の2者に対するのと同じ「彼らはリーダーだが、コミュニティをきれいにさせてはいない」というものもあった。

これら3名のリーダーとして名指しされた人たちを推す明確な理由がほとんどないことが分かった。「リーダーはいるか」という質問に対して「このコミュニティにリーダーはいない」と答えた人が9名いたことをあわせて考えれば、上述の3名は人々が積極的に支持する魅力を持っていたり、あるいは指導力を発揮して人々の先頭に立っていくような人たちでは決してないのではないかと考えさせる。

4 - 1 - 5 便所や水道施設

三者に共通する第五の共通点は、かつては不法占拠していたが、政府から購入し（支払い中を含む）、定住すべくコンクリート製の家屋を建設し、さらには水道を引き、下水処理などの施設を独自に設けている点である（写真 1）。回答者89人中、トイレを自宅に持たない人たちが56人（63%）いるが、三者が中心になってコミュニティの



写真 1 浄化槽を備えたトイレを建設中のタールリッシュビットの住民(江口信清撮影)

玄関近くに公衆トイレを設置したことは別稿で触れた（江口 2001）。便所を自宅に持たず、公衆便所を使わない人は溝で排泄したり、あるいはプラスチックの袋に排泄し、それを捨てることになる。公衆衛生上よくないが、この3名はそういう意味でコミュニティの公衆衛生の向上に大きく貢献してきたといえる。回答者89名のうち、トイレを屋敷地に持っているものは33世帯しかなく、持っ



写真 2 水が出っ放しの公共水道栓（江口信清撮影）

ていない世帯が56世帯（約63%）にもものぼり、衛生問題の解決はコミュニティにとって最大の課題の一つである。水道を家に引いている世帯はトイレを有している世帯数とまったく逆で56世帯（約63%）にのぼる。逆に37%の世帯が公共の水道に依存しているが、公共の水道は無料であり、その使用の仕方はいい加減である（写真 2）。

4 - 1 - 6 教育

リーダーとして名前を挙げられた3名のうち、マヴリン・アダムズのみが高等学校を卒業しているが、あとの2名は初等教育しか受けていない。しかし、もちろん読み書きはできるし、話もうまくこなすことができる。政府の機関

(地方開発局) のターリッシュピット担当者も、この 3 人をコミュニティの代表であると認識しており、外国の NGO などがターリッシュピットに関心を持つ場合にはまずこれらの 3 人と接触を持つようにしてきた。コミュニティには師範学校を卒業して教員をしている住民もいる。しかし、教育はリーダーとしての要件では必ずしもないようだ。

4 - 1 - 7 名指しされた 3 名のリーダーと物質文化

どれほどの電化製品がターリッシュピットの人たちに所有されているのか、主要な電化製品などの所有の程度を示したものが表 4 である。名指しされた 3 名のリーダーはテレビ、冷蔵庫、そして各人が電話を所有しているが、パソコン、洗濯機については共通していない。

表 4 主要電化製品等の所有状況

製 品 名	所有する世帯数	割合：%
テ レ ビ	65	73
冷 蔵 庫	52	58
洗 濯 機	22	25
電 話 機	44	49
パ ソ コ ン	8	9

注) 2003年 8月 6～12日のインタビュー調査による。調査では、ビデオデッキ、ラジオ、ラジオ・カセットレコーダー、エアコン、ガスストーブについても調べたが、ここでは省略する。割合の小数点は四捨五入してある。

しかし、3 種の神器 (テレビ、冷蔵庫、電話) を有している点では、平均、あるいはそれ以上の生活水準を有していることが分かる。ターリッシュピットではテレビは 73% の世帯が、冷蔵庫は 58% の世帯が、電話機は 49% の世帯が所有されている。それに対して、洗濯機は水道が引かれていない世帯にはもちろんなく、所有する世帯はコミュニティ全体でも 25% 足らずである。そして、パソコンは全体の 9 % 足らずの世帯しか所有していないが、ケニス・チャールズ

の場合は、パソコンを1台所有し、それを2人の娘が主に使用している。2人の娘の1人は18才で、現在ドミニカに唯一の短大に通い、パソコンは彼女の教育に有効に使われているようだ。また、13歳の娘も家でパソコンを巧みに使い、勉強に役立っているということである。

4 - 2 コミュニティの問題に対する意識

「コミュニティ開発にとっての問題点」についての質問では、リーダー3名の指摘する問題点を多くの住民が同様に挙げている。最大の問題点は衛生問題であり、失業、そしてドラッグなどである。チャールズは移動の自由がないということを挙げているが、これはコミュニティ内の一部が危険に満ちているということを表現したものである。また、アダムズは教育を挙げているが、高等教育を子どもたちに受けさせることで貧困からの脱出が可能である、と彼女が考えているからである。リーダーの3名以外にも、同じ問題点を指摘するものが多く、その他に嫉妬、連帯（協力）の欠落、物資の欠落、保育園の欠落、ごみ、無視、なども指摘されている。最も多い回答は、協力体制がないことである。協力すれば今より良い状態に出来ると考える人が多いが、協力していないという、共同戦略のジレンマを反映している。

4 - 3 ターリッシュピットのリーダーの一人、テルフォード・ローレントの生活史

ここで上記の3名のリーダーのうちの一人、テルフォード・ローレント（40歳）がターリッシュピットに流入し、今日に至るまでの簡単な歴史を彼の語りの形で見ておこう。

出身地グッドホープを出るまで

私自身は、グッドホープからやってきました（島の大西洋岸）。私は、グッドホープでは農業に従事していました。しかし、ハリケーン・デーヴィッドが1979年9月に襲来したとき、パナナを主とする農作物すべてがやられてしま

ったのです。どこへも行き場所がありませんでした。私は活発な人間であって、出て行く決心をしました。町にはもっと活動があると、期待して出てきました。私は、働くことを学んでいきました。私は町で建設の仕事を見つけ、ここ（ターリッシュピット）に落ち着きました。私がグッドホープを出たのは、18歳のときでした。今は40歳です。

私の祖先にはカリブ族がいます。曾祖父はフランス人でした。だから、カリブとフランスの血が混じっているので、明るい肌の色をしているというわけです。

ターリッシュピットへ来る

1979年のハリケーン・デービッドの直後から、人々はシェルターを築き始めました。なぜなら、ハリケーンが壊滅的な打撃を与えたからです。ここターリッシュピットは、シェルターを築けるロゾーから最も近いところの一つでした。ここはターリッシュを採る所で、名前はそれに由来しています。本格的に人々がここへやって来るようになったのは、ハリケーンから3年後（1982年）のことです。人々は島全体からやってきました。ここへ私が来た時には、今の場所とは違った所に落ち着きました。私はもうちょっと下がったところに、小屋を借りて住んでいました。現在のここにも貸し手が小屋を持っていたので、私がそれを買うことにしたのです。1989年のことでした。その頃には、土地はまだ官有地でしたので、私は小屋だけを買ったということになります。1999年に土地を購入しましたが、分割で今も払っています。私は月払いのサラリーマンでもないので、金がある時に払うのです。2,800ECドルが（およそ12万3000円）この土地の値段です。この値段は、通常の価格ではありません。私たちは不法占拠者で、コミュニティ何のすべてのインフラストラクチャーを自分たちで整備しました。こういうことを考慮した価格なんです。現在、ここではすべてが測量され、すべての人が払っています。ある人たちはまったく払っていないし、ある人たちは支払い中で、ある人たちはすでに払い終わり

ました。2年前にはそんなことはありませんでした。ロゾー・シティ・カウンスルの人が溝を掃除したりして維持しているので、ここはロゾー・シティ・カウンスルの一部ということになります。管理委員会がその人物を推薦し、ロゾー・シティ・カウンスルが賃金を支払うのです。

私は、建設や大工など、さまざまな仕事をします。仕事があるときには一生懸命働きます。毎日でも。必要なら土曜、日曜でも働きます。たいてい仕事を見積もって、規模に応じて総額を示して、仕事を請け負います。ドミニカには金がなく、95%の時期、全額を一時に支払ってもらえることはありません。たとえば、1000ドルの仕事を請け負けても、ある時に100ドル、別なときにいくらという風に進みます。最大値で金を請求することはできません。

私はここに21年間住んでいます。ますます多くの人たちがやってきましたが、そのうちに道路や水の必要性を痛感し始めました。

ターリッシュビットでのコミュニティ作りとボランティアワーク

私自身はボランティアワークをしながら道路を作り、水場を作りました。私たちは、自由党の議員で、コミュニケーション・労働大臣だったヘンリー・ダー氏に頼んで、水道用のパイプの支援を頼みました。これを与えてもらい、私たちは水を引きました。これが、私たち自身による開発事業の最初のものでした。これは1983 - 84年のことでした。その後、私たちはブロックプランなどを推し進め、排水溝作りを進めました。道は良くなりました。ここへ来て、定着する人の数が急増していきました。若い人たちが中心でした。この95%の人たちは、50歳以下でした。私たちは集団を組織し始めました。改善委員会などです。私たちは地方政府に支援を頼みました。溝や便所を作るための資材などを、地方政府に支援してもらいました。このような協力にまったく手を貸さない人も多くいます。私たちが2,3人で働いているとき、私たちを見て笑う人もいます。何もしないで動き回るものがある一方で、勇気を与えてくれる人もいます。私たちは、コミュニティ精神を持っているのです。このよ

うな人たちが「われわれ」なのです！

地方政府の関与と施設の建設と運営

人々はよりよいことを考え始め、自分自身学んでいきました。それで、政府が関与し始めました。測量し、ロットに分割していきました。そして、占拠者に売り始めました。その結果、人々はより快適に感じ始めました。私がたどったプロセスは、まず外部から外国人がやってきて、私たちの生活実態について調査をします。この人たちは、私たちの運動を調べました。それは1995年のことでした。そして、その後帰ってきて、プログラムが開始されました。それがリソース・センターの建設だったのです(写真3)。人々がやってきて、まず何が優先されるべきか尋ねました。リソース・センターか、公衆トイレでした。しかし、リソース・センターが「われわれ意識」を促進するために重要であるし、人々に雇用の場を作る場として重要である、と同意しました。そして、私たちは建設を開始しました。私たちは、地方政府と協力して働きました。私たちがプロジェクト・リーダーでした。それが完成し、現在運営されています。

人々は教会のサービスを催し、結婚式をやったり、いろいろな活動が行われています。それらのためにリソース・センターを貸し、コミュニティのための基金を得ています。人々がリソース・センターを教会として使います。クリスチャン・ユニオンが借りるのです。これはカトリックではありません。最近、私たちはステップ・プログラムというプログラムによって、便所を作りました。私自身が作ったのです。このプログラムでパ



写真3 ターリッシュピットのリソース・センター
(江口信清撮影)

ンを買うぐらいの金を、参加者は得ました。ほとんどボランティア仕事ですが、わずかの賃金を得ました。政府が替わったとき、私たちはやめました。今の政府では、100%動いているわけではなく、あらゆることがスローです。ここでは、15%の人が雇用されているのみです。私は建設業に携わっていますが、仕事はあります。ここが豊かなコミュニティでないことは、すぐにお分かりでしょう。

管理委員会と諸組織

コミュニティの動きを監督するために設けられた委員会、それが管理委員会です。調査終了後に、地方政府が委員会を組織しないか、と尋ねました。私も選出されたメンバーです。かつては村落委員会とも称していました。ここで生じる大方の活動を取り扱います。これは、ボランティアなコミュニティの組織です。人々が役員を選出するために、投票します。3年ごとに選挙です。再選は認められています。マヴリン・アダムスが委員長です。彼女はたいへん尊敬されている人物です。彼女は病院で事務か、何かをやっています。この委員会が設けられて6年目になります。地方政府がこの委員会の設置について提案しました。私たちは主にリソース・センターの事柄を管理するために、この委員会を設置したのです。私たちは月に1度の会合を持っています。時として、もう少し頻繁に会合を開くこともあります。私たちは、ドラッグの問題を解決するために議論してきましたが、怠惰のために参加しない人も多くいます。ドラッグを取り締まる役人がしばしば訪れます。時には、1日に3回もやってきます。このことが、このコミュニティにネガティブなイメージを与えます。多くの人が政治には関与してきました。たとえば、政党のキャンペーンや会合に参加するという形で。政府は常に変わります。私自身は政治が好きではありません。チャールズ女史の時代はベストではなかったが、ほかよりも良かったと思います。彼女のときには、より高い階級の、一握りの人のみが利益を得たのですが、連帯労働党のエジソン・ジェームズの下では、誰もが彼のところへ

行けました。財務大臣が36袋の食料をくれました。彼は、今でも皆と一緒にであるというサインを見せているし、貧者のことも忘れないというサインを見せています。

管理委員会のほかに、いくつかの組織がコミュニティにはあります。それらのひとつはドミノ・クラブです。このクラブはずいぶん前にできました。これはスポーツクラブで、ドミノをしたり、トランプをしたりします。これは主としてスポーツ・クラブですが、管理委員会と協力することも多いのです。多くの開発プロジェクトにも関わってきました。主として、若い男性が主体で、ときとして女性のラウンダースを組織することもあります。

フットボール・チームは、シーズンにはフォンコレからニュータウンまでの全域でプレイします。20～30チームが参加します。チームメンバーの数名は管理委員会のメンバーでもあります。

私の特に仲が良い友人の一人のレイノルド・グスタフは機械工で、管理委員会のメンバーではありません。彼はフットボールをやります。彼はガレージを持っています。ジェイク・アベルは時々一緒に建築に従事します。彼は管理委員会のメンバーではありませんが、コミュニティの活動には参加します。タディア・リントンは配管工ですが、やはり管理委員会のメンバーではありません。彼はたいていはコミュニティの仕事には参加します。

私は多くのコミュニティワークに参加し、かつ基金を得るためのダンスを組織する責任を持つので、コミュニティの活動には協力してきました。

ターリッシュピットがなぜネガティブに見られるかの理由

ターリッシュピットの最初の頃、それは少々急激でした。ここの人々は、国のあらゆるところからやってきました。彼らは叔父、兄弟、姉妹のような人たちではありません。ここにやってくる人たちは異人なのです。あらゆるタイプの人があります。善い人もいるし、悪い奴もいる。善い子もいるし、悪い子もいる。たいていの異人同士は、恐れることもないのです。どこへ行っても善い人

も、悪い人もいるものです。

人々は、異なった態度があります。ある人たちは怠け者で、ドラッグをやったりします。彼らは決して活発に働こうとしません。私たちは自発的に働きます。ここに違いを認めることができるのです。なぜなら、常に積極的に働くものは、金があってもなくてもそうするからです。怠惰で、ドラッグやその他に走る人には、コミュニティの仕事を続けるのは難しい。たとえ金のためであろうと、なかろうとです。私たちはたいてい2週間ごとに賃金をもらいます。しかし、ドラッグに走るような人は、働いてすぐに金を欲しがります。まったく異なるタイプの人たちです。こんな人たちを扱っていると、疲れます。この人たちは、たいてい18～35歳の若者です。彼らは同じ所にいます。彼らは時々ちょっとした仕事をしたり、他人から盗んだり、あるいは恐喝したりするのです。彼らはよくは見えません。この人たちは、長期的な展望を持っていたりしません。その場その場がよければそれでいいのです。

ターリッシュピットの何が最大の問題なのか

ここの現在の最大の問題は、雇用の問題です。雇用の不足はたいへん深刻な問題です。しかし、同時に、ドラッグをやっている若者が多いことも重大な問題です。これが、協力と欠落とを生む原因になっているのです。これらの2つが、ここの主要な問題です。

5 外部依存の傾向を示しているのか

すでに見たリーダーたちが中心になってこれまでいくつかのプロジェクトがターリッシュピット内で推進された。これらのプロジェクトの担い手はターリッシュピットの住民なのだが、何が必要なのかといった評価と資金や資材の供給は内部からのものではなく、政府やNGOによるものであった。たとえば、「芳香ろうそく作り(表5)」はアメリカ人平和部隊隊員が主導したもので、1

年間の任期中にローソク作りのためのボウル、蠟、絵の具、その他を彼女が用意し、ターリッシュピットの女性向けに開発されたプロジェクトである。何人もの女性が参加し、作られた芳香ローソクはロゾーで販売された。それにもかかわらず、アメリカ人が帰国した後、誰が音頭を取って続けるでもなく、活動は止まり、コミュニティ・センターに材料が眠ったままである。自主的な動きが見られないのである。外部から誰かが来て、資金を供給してくれることを期待する人がひじょうに多い。筆者の調査中にも「何を持ってきてくれたのか」「次には金を持ってきてほしい」などと、被調査者（リーダーを含む）の多くが期待を表明した。

表5 ターリッシュピットで、近年実行されたプロジェクト

プロジェクト名	実行主体
1) コミュニティ・センター（リソース・センター） 2階建て。保育園にも使えるが、現在、日曜日と月に1度、教会に賃貸。結婚式や葬式に使用することができる。使用料金は、コミュニティ基金として管理。	地方政府・管理委員会（実際には3名だけが労力奉仕）
2) 被災縮小基金プロジェクト（継続中） コミュニティの南端（低い土地で、溝）のコンクリートを用いて整備。	地方政府・災害調整ユニット
3) 階段・道路の整備	地方政府・管理委員会（不完全）
4) 芳香ろうそく作り	女性グループ・平和部隊・地方政府（休眠中）

6 政府の後手の対応：測量と分譲

いまだかつてドミニカ政府が貧困の撲滅や、スラムの防止策を積極的に打ち出したことはない。スラムが形成され、貧困が顕著になって初めてなんらかの手をうつ対症療法が検討されたのである。休眠状態のプランテーション農園を買いとり、それを住宅地に転換することもその1つであった。今日、政府自体

が国を運営するだけの十分な予算を組めない状態にあり、積極的なスラム化防止策などは期待できないのである。そんな中で講じられた苦肉の策の一つは、スラムの不法占拠地の測量と占拠者に対するこれらの土地の分譲である。占拠された官有地を測量し、それを分譲するのである。こうして政府は市場価格よりもずいぶん安価で分譲する。購入者は土地を抵当にして銀行から借金し、家を建てる。長期間かけてローンの返済をする。このようにして、多くの不法占拠者が合法的な土地所有者に転換することになる。ただ、借入金を返還できない人は土地を取り上げられることになる。

不法占拠地に対する政府の対応策は、町のスラムだけでなく、農村における不法占拠に対しても同様の方法で適応されてきた。

おわりに

本稿では、まず、ドミニカでの不法占拠地の形成について触れ、土地の不法占拠が奴隷解放後の村落の形成過程で住民に馴染のあるものとなっていく点を指摘した。国土のほとんどが急峻な傾斜地からなり、奴隷制の時代からこれらの土地は農業に不適な、王室御料地（官有地）として手がつけられなかった。奴隷解放後、プランテーションの土地を分譲で手に入れるだけでなく、自由になった人たちは官有地に不法に進出し、村落や畑を形成していった。他方、唯一の都市ロゾーへ人が次第に集中していくのだが、ロゾー川の沖積地上に形成されたロゾーは、小面積で、新たに家を建てる余裕さえないように見られる。1945年の調査時のロゾーのスラム化した状況は、他の村落周辺やロゾーの南北に延びる海岸道路に沿っても見られた。これらの不法占拠地域の形成要因としては、奴隷解放後の、いわば慣習化した農村部での不法占拠の存在、ハリケーンによる家屋の喪失、土地の購入や借地のための資金不足、平坦地が少なく、新たに家屋を建てる空間が限られているという地形的問題などが挙げられる。

今日ではロゾー市域に組み込まれているターリッシュピットは、1979年のハリケーンの来襲によって家を喪失したロゾーや農村の人たちや、町へ行けば何かがあると信じて流入してきた人たちによって形成されてきた。ここでの今日の自生的リーダーと目されて人たち3人の特徴について見てみると、この人たちは周辺の多くの人たちを引き付けるだけの強力な魅力や力をもつわけでは決してない。マックス・ウェーバーの類型になるカリスマ支配(ウェーバー1970)の要素がこれらの自生的リーダーに見られるわけでもなく、また市井三郎がいうところの、社会を主導するキーパーソンとしての迫力にも欠けるのである。ただ、この人たちに共通する点は、勤勉さ、教育、計画性を重視するといった中産階級的価値観をしっかりと身に着けているということであり、また農村部で行われてきた無償の労働力交換等の慣習を引きずった形でこのコミュニティに定着してきたことである。正式に結婚しており、少なくとも他者に迷惑をかけないし、率先してコミュニティに関わる仕事をしてきたという点では、この人たちは農村でも尊敬される人たちでもあると言える。彼らの基本は、自分の生活を少しでも快適にしようという意識を持ち、そのためには周辺の環境を整備しなければならないということである。コミュニティ内の道路作りに始まり、水道敷設、そしてコミュニティ・センターの建設にいたるまで、他に率先して作業に従事してきた。まずは自分たちの生活基盤を改善し、さらにはコミュニティの人たちのためにという思いがあるからである。この人たちの特徴は、山本勇次がネパールのスクンバシ集落(スラム)の自生的リーダーの特徴として指摘した点とほぼ一致している。それらは、スクンバシ集落の創設期からの居住者、性格が明るくて親切で人付き合いが上手で、対外的抗争には率先して立ち向かう度量、学歴は不要だが読み書きができるなどの特徴を併せ持つ(山本 2001:218~219)。さらに、「一般的な社会構造上の特性とか、特定カーストの出自などはまったく必要がない。ただその人が個人として親切で有能で魅力的かどうか重視されるのである」(ibid.:219)。ドミニカにはカースト制は存在しないが、対外的抗争に率先して立ち向かう度量という点

については、ドミニカには対外的抗争に代わって、外部の援助機関や政府の機関との交渉をつとめるなどの、コーディネーター的役割をはたしてきた¹⁾。

リーダーを中心にコミュニティの一握りの人たちが達成した成果を、何も貢献していない多くの人たちが享受するという状況は大きく変わっていない。コミュニティ構成員全員が協力して、プロジェクトを推進する状況はいまだ生まれていない。そういう意味で、協同戦略のジレンマは存在しているのである。特定の人物をリーダーであると指摘しながらも、自ら進んで協力するわけでもなく、「彼らは何もしてくれない」という常に他者に依存する傾向にある人たちがどのようにすれば変えることができるのか、それを究明することも貧困問題を解決する上で重要なのである。本稿では資料を単純な形でしか分析していない。今後、より詳しく自生的リーダーと協同戦略のジレンマの問題に迫ることが課題として残されている。

注

本稿の資料の1部は、立命館大学人文科学研究所プロジェクト研究Bによる資金によって2002年12月28～2003年1月6日に実施された調査、そして科学研究費基盤研究(AⅡ2)「スラム地区住民の自生的リーダーシップに関する地域間比較研究」(課題番号:15252004、代表:江口信清)によって2003年8月6日～8月23日に実施した調査で収集された。

- 1) スラム社会とは違うが、日本の各地、フィジー、ソロモン諸島等における「地域文化資源の開発」で重要なのは、人材の有無である、と橋本和也は指摘している(橋本 2003)。彼の指摘するリーダー(彼はリーダーとは称さないが)の属性は、ドミニカのスラムのリーダーが有するものに類似している。

参考文献

- 市井三郎 1963 『哲学的分析—社会・歴史・論理についての基礎試論—』岩波書店。
- 江口信清 2001 「ネガティブな他者の創出—カリブ海ドミニカ国のスラムの事例—」
藤巻正巳編『生活世界としての「スラム—外部者の言説・住民の肉声—」』立命館大学人文科学研究所研究叢書13、古今書院:1-27。
- 江口信清 2002 「貧困からの脱出を阻害するもの—ドミニカ国農民社会の事例—」『立命館大学人文科学研究所紀要』No.80:1-28。

- 橋本和也 2003 「地域文化資源『開発』と観光」京都人類学研究会第14回季節例会での報告。於京都大学、12月13日。
- マックス・ウエーバー 1970 『支配の諸類型』世良晃志郎訳、創文社。
- Thelwell, Arthur 1950 *The Situation Report on Squatter Problem and Land Use -Island of Dominica*. Kingston, Jamaica: Lands Department.
- Town Planning Advisor to the Comptroller for Development and Welfare 1946 *Report on Draft Proposals for a Town Planning Scheme for Roseau, Dominica*. Roseau: Advocate Co., Ltd.
- 鶴見和子 1996 (1989) 「第2章 内発的發展論の系譜」鶴見和子・川田 侃編『内発的發展論』東京大学出版会。
- 山本勇次 2001 「ネパールの民主化と都市スクンバシ集落の「コミュニタス」の特徴—ネパールの都市スラム街に咲いた自治組織の花は枯れてしまうのか—」『立命館大学人文科学研究所紀要』No.76: 199-246。